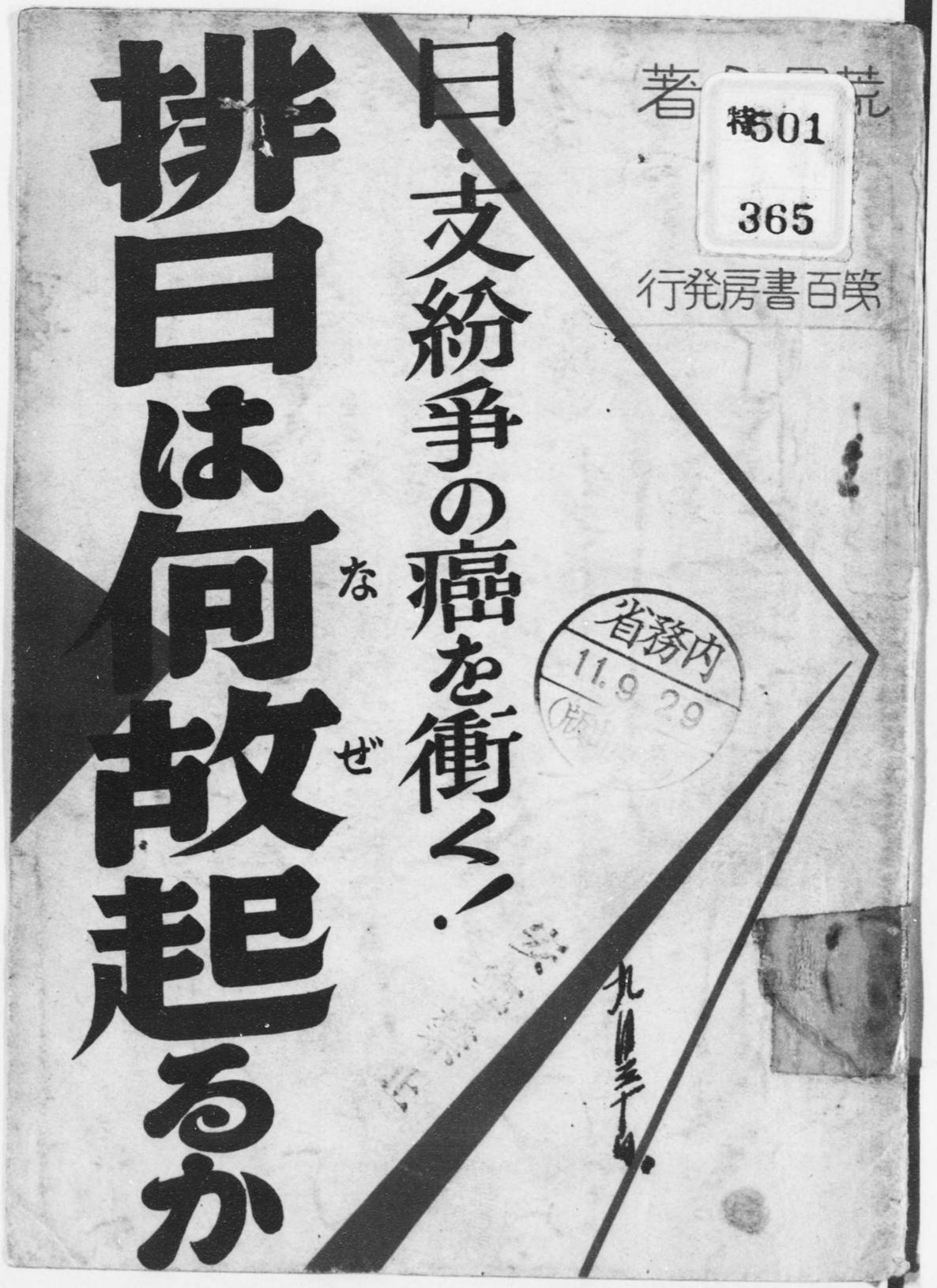

特501
365

0010941000

1

0010941-000

特５０１－３６５

排日は何故起るか

荒尾久・著

第百書房

昭和１１．１０

ABJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

排日は何故（なぜ）起るか

日・支紛争の癌を衝く！

著 [illegible]荒

特501
365
第百書房発行
内務省

741

荒尾久著

排日は何故起るか

東京・第一書房發行

永久保存

特501
365

52.9.5
圖書館藏書

目次

一、第十回抗日運動の展開……（五）
二、何故に支那の排外運動は日本に集中されるか……（八）
三、支那人は果して排外的であるか……（九）
四、支那に於ける排外運動の史的發展……（一六）
五、支那に於ける排外運動の階級性とその運動形態……（一八）
六、支那に於ける對外闘爭と帝國主義列強の對立……（三）
七、支那に於ける對外闘爭と學生運動……（二七）
八、支那に於ける對外闘爭と支那支配階級の態度……（三〇）
九、第十回抗日運動と人民戰線との關聯並にその特色……（三三）

77W33641

排日は何故起るか

荒尾久

一、第十回抗日運動の展開

昨一九三五年の北支那事變を動機として、今や支那においては、抗日運動が全國的に展開されてゐる。曰く、昨年十二月九日における運動、同月十六日の北平學生の大示威運動、曰く、上海における中山、萱生殺傷事件、曰く、六月における平津地方における北支那駐屯軍擴大反對の學生運動、曰く、八月成都における領事館再開反對運動による四邦人殺傷事件、曰く、九月北海における邦人虐殺事件

漢口における巡査射殺事件、曰く、最近上海における巡邏兵狙撃事件等々。しかも、日支間におけるかゝる不祥事件は、今後なほ、處々において、頻發すべしと懸念される理由が充分に存在してゐる。

かうした一聯の不祥事件は、決して個別的なものではなく、同一な動機から出たところの關聯性をもつた統一的な抗日運動であるのである。

この一聯の抗日運動（過去三十年間における三年一回の抗日運動）は、顧みれば恰も第十回にあたるのである。第一回は一九〇七年の第二辰丸事件、第二回は一九〇九年の安奉線改築問題、第三回は一九一五年の廿一ケ條要求提出、第四回は一九一九年山東還付交渉第五回は一九二三年の旅順、大連回收要求、第六回は一九二五年の五卅事件、第七回は一九二七年の山東出兵、第八回は一九二八年の濟南事件、第九回は朝鮮事件、滿洲事變、上海事變等による排日及び排日貨運動であるのである。

これで見ると、日本は一九〇七年から今日まで、約三十年の間に十回も排日運動乃至抗日運動によつて、隣邦支那から惱まされてゐるのである。卽ち日支間には、最近三十年の

間に、三年目毎に、兩國間の紛擾が發生してゐることが判るのである。日支關係の複雜にして多難なることは、これによつてさへも、充分に理解されねばならない。

前清時代には、支那と英佛等との間には、幾たびか血腥い衝突を繰返したが、その時代に支那から排斥運動を受けたのは、一九〇五年支那移民私刑問題による排米運動と、一九〇七年及び一九〇九年の排日運動だけである。一九一二年中華民國成立以來は、アメリカは一回も排斥運動を受けることなく、イギリスは一九二五年廣東沙面射撃事件によつて、たゞ一回のみ、大規模な且つ組織的、執拗なる排英運動を被つたが、その外は、大なる排斥運動を受けてゐない。これによると、清末以來今日に至るまで、支那から排斥運動の厄運を受けてゐるのは、支那を繞る列强のうちで、殆んど日本一國のみであるといふことができる。これが同文同種といはれ、日支共存共榮、日支親善が叫ばれる日支兩國關係の殆んど常態であるといふことは、實に悲しむべき、また怪訝に堪えない現象であるといはなければならない。

排日は何故起るか

二、何故に支那の排外運動は日本に集中されるか

一九〇七年以來、支那における排外運動は、上に述べたごとく、殆んど日本に集中されてゐることは、嚴存する事實が我々に教へるところである。

それは何故か？　吾々が、遮眼帶をとりはづし、また先入感をとり除いて、公平に事實を觀察するときは、その理由を容易に看取することができる。

1. 日露戰爭以來、日本の對支進出が發展したこと。
2. 日本が滿蒙において、ロシアに代り權益を獲得したること。
3. 日本商品の支那市場への進出增大し。
4. ロシア革命によるロシアの在支權益を放棄せること。
5. 支那民衆の民族意識の發達せること。

6. 日本の對支進出の積極化による、日本對他の列強の支那における對立の激化せること。

と。

等々は、近來において支那の排外運動が、日本にのみ集中された理由である。

三、支那人は果して排外的であるか

この國においては、かく排外運動が日本に集中されてゐるために、支那人はその民族性として排外的であるといふことが、よくいはれてゐる。

かゝる見解を抱くものは、獨りこの國の人々のみではない。一九〇一年六十七の高齡をもつて逝いたフランス第一流の國際法學者デジャルダン氏も、その死の前年、『支那と國際法』なる論文において、次のごとく述べてゐる。

『彼等の無頓着なる、彼等の無感覺なる、彼等の絶對的排外なる、其度や實に測る可らず。其の在る所の秘密結社の大分たる太平會のごとき、三合會のごとき、白蓮會の如き大刀會の如き、義和團の如き、時には則ち政府と合ひ、時には則ち政府と離るゝあるも

其間一種の默契あるに似たり。而して是等の諸結社たる、何れも皆排外主義を持せざるはあらず』

（註一）明治三十四年六月、支那調査會譯『國際支那』第四一頁

しかし邦人やデジャルダン氏のいふがごとく、支那民族は果して先天的に排外的であり、それ故に支那において排外運動が執拗に反復されるのであらうか？　吾々は近代における支那の國際的地位を歴史的に考察するときは、かゝる見解の決して眞實でないことを發見するのである。

支那は、明朝末年以前においては、決して鎖國ではなかつた。ローマ、アラビヤ等と盛んに交通してゐた。そして排外的ではなかつた。十六世紀にポルトガル人がはじめて支那に來たときには、支那は門戸を開放してゐて、決してこれを排斥することはなかつた。それは、まだ外國との經濟關係は封建制の枠のうちで行はれ、外國との交通は、支那の政治經濟機構に對して、寸毫も脅威を與へなかつたからである。

しかし、十六世紀においては、ヨーロッパは商業資本が本來的蓄積を開始し、海外において殘虐なる行爲を敢行するときであつたから、そのことが支那において、實際に演ぜられるやうになつて、明朝は始めてこれを警戒し、段々鎖國政策をとるやうになつたのである。支那においては、一五三五年にポルトガル人七、八百人を虐殺し、船舶三十五隻を燒拂ひ、一五四五年にはポルトガルとの衝突あり、一五五九年には泉州において五百人の虐殺が行はれたのである。かくして明朝がポルトガル排斥、鎖國政策に出たのは、その資本主義生産への曙光である資本の本來的蓄積が、次のやうに殘虐な樣相をとるものであることを感知したがためであつたのである。

『アメリカにおける金銀産地の發見、土着民の剿絶、その奴隷化並に鑛山内への埋沒、東インドに對する征服及び卸掠の開始、アフリカを商業的の黒人狩獵場に轉化せしめた事實。』

かかる殘虐なる事實が、正さに支那においても展開されやうとした狀勢、これこそ明朝をして、その末年に鎖國政策に追ひ込み、更にその政策が、清朝においても踏襲された理由である。支那人は決して排外的ではなかつたのである。支那はかくすることによつて、

インドの運命から免れたのであつた。

イギリスは、一六三七年にはじめて支那に現はれたが、產業革命を經て資本主義の發達してゐたイギリスは、商業資本に基礎をおくポルトガル、スペイン、オランダを壓倒して支那貿易において覇權を掌握した。イギリスはインドから支那へ阿片を贈り、またその機械製の綿糸布を支那に齎らした。しかし阿片は、支那の生活液ともいふべき銀貨をインドへ流出しはじめしめ、綿糸布殊に綿糸は支那の社會構成の物質的基礎であるところの『小農業と家內手工業との合一の太初的な必須成分であるところの紡績業と機織業』を壓迫しそれに相應じて、支那社會一般は一大動搖を蒙るにいたつたのである。

そこで清朝は、阿片輸入に對して、峻嚴な敕令を下したが、イギリスは印度財政上阿片の支那への密輸出を執拗に行つた。清朝はまた貿易に對しても制限を加へたが、イギリス資本主義商品の販路擴張に迫られてゐるイギリスにとつてそれは堪え難い苦痛であつた。

銀の流出、綿糸布の輸入等が、支那社會に一大經濟的結果を齎らした外に、阿片密輸に關聯する賄路の行使は、支那の政治機構に重大なる危機を齎らした。その賄路の行使は南

部諸省の支那國家官吏達を完全に墮落せしめたが、尨大なる國家機構を結合するところの道德的紐帶であつたところの族長的權威——支那では皇帝を全土の父、官吏をその管轄區域の父とあがめてゐる——が、阿片密輸援助による法外な儲けをした官吏の墮落によつて次第に倒壞してしまつた。皇帝並に國陋の大官の首腦部は益々その支配權を失墜してしまつた。

かく政治上、經濟上、重大な脅威に陷つた支那は、鎖國によつて斷乎排外的たらざるを得ない。だが、それはイギリスにとつては、堪え難きものであつた。遂にかくして一八四〇年の阿片戰爭が、イギリスとの間に發生したが、このイギリスの加農砲——武力によつて、支那社會の崩壞的因子は、完全な發達段階に到達したのである。

爾來、支那の混亂は激化し、その半植民地化道程は激化し、太平天國の亂（一八五〇—一八六四年）が勃發し、更に日淸戰爭によつて支那の危機は激化し、その結果、北淸事變（一九〇〇年）が勃發し、更にその半植民地過程が激化されたが、帝國主義段階に入つて支那の領土再分割がはじまつて來た。

排日は何故起るか

かくのごとき歐米列強の支那侵入によるその經濟的、政治的危機並に領土、主權の侵害

これこそが、支那民衆をして排外運動に驅り立てるところの客觀的な基礎であるのである。かゝる客觀的基礎の認識なきもののみが、支那人に「排外的」の烙印を押すのではあるまいか。

また支那人は、儒教と灌漑米作との感化によつて、その性格は平和的である。しかし他の反面において、肉食と部落生活とのために、殘虐性を有してゐることは否定できないようである。殊に異人種に對してそうである。そのことが、支那における排外運動に表現されて、外人なして支那人を排外的、野蠻的であると認識せしめるに、與つて力あるように思はれる。曩のデジャルダン氏も、その例に洩れない。彼は次のようにいつてゐる。

『同類なる人間の死刑の場に出席するも、毫も哀憐の情あらず。且つその刑の方法たる時間長くして精細を極め、流血滾々として慘の至りなるも、觀者は恰も鑑定家の如く、平然之を傍評し、嘗て意に介する無し。又貧窶の支那人に至りては、場合の已むを得ざるあれば、呱々の聲を發する赤兒を殺して、途上に投じ、或は生きながら、籃中に容れ

て、街衢に棄つれば、此國の市府内到る處に徘徊せる野犬若くは豚爭ひて之を食ふも、亦顧るあることなし。若し其れ、此國裁判の結果たる刑罰を顧みん乎、其殘忍酷薄なる世界の歴史中未だ曾て見聞せざる所なり。』

かくて彼はつゞいて、次のごとく支那の刑罰について述べてゐる。

『支那の治罪たる、實に殘酷を極むるものあり。フイールの國際法「アンスチチユー」に提出せる書中の一二句を引用し來らば、之を證明するに餘りあらん　其言に曰く「余は親しく支那の罪人が法官の前に喚出さるゝを目擊したり。罪人は何れも頸に鎖を施され鎖の一端には重石を結びつけたり、故に些の動作も自由ならず。乃ち罪人は法官の前に出で來るや、唯だ其目だけ僅に上に視揚ぐるを得るのみにて、訊問の間中、手をつきて地上に坐せしめらる。其法官の周圍には一群の兵卒ありて、一分法官の働きを爲し、罪人に向ひて問を發し、又其答の中止等に任ぜり。若し其罪人抗論して罪に伏せざる時は笞杖の卒起ちて拷問に從事すなり」と。人其れ之を如何にか思量するや。非人道の擧は以て治罪手續にまで實行せられつゝあり。

排日は何故起るか

凡そ支那に五刑あり、一は笞杖、二は徒刑、三は點竄、四は流謫、五は死刑即ち是なり其死刑は則ち如何と爲すや。支那の殘酷や際限あること無し。斬首、絞殺、磔刑を以て未だ滿足せず、百虐の刑、寸斷の刑、醢刑、火刑等枚擧に遑あらず、嗟乎我亦此に已まんのみ。我未だ支那刑法の制に比すべき暴虐無慘を睹ざるなり。』

（註一）デジャルダン編、邦譯『國際支那』第四五―六頁

（註二）同上書第七一―二頁

今回の成都北海における邦人虐殺事件において、我々はかくのごとき殘忍酷薄を見せつけられたることを悲しまざるを得ない。

四、支那に於ける排外運動の史的發展

阿片戰爭前後よりの、支那排外運動の今日までの史的發展を考察するときに、我々はそこに、その內容と形態、本質の變化を發見することができるのである。

初期における支那の排外運動は、多くは農民、手工業等を主體としてをり、それは外國人の排斥を目標とし、本能的、偶發的であり、殘忍性を帶びてゐたのであつた。この時代の運動こそ原始的で眞に排外的であつたといふことができよう。

しかし、北淸事變以後において、支那に對する歐米列强の經濟的侵略が深化し、殊にヨーロッパ大戰以後において、支那にブルジョアジー並にプロレタリアートが發生し、殊にまたロシア革命の影響を受けて、プロレタリア戰術が支那に輸入されると、支那における排外運動は、ブルジョアジー、小ブルジョアジー、プロレタリアート農民を主體とし、對外經濟絕交をその內容とし、その運動形態も組織的となり、種族意識も昂揚し反帝國主義鬪爭をその本質とするようになつて來たのである。この時代における支那の排外運動は、これを眞の意味における「排外的」と見ることはできない。

殊に、支那の排外運動が、意識的組織的となつたのは、かの一九二五年の五卅事件以來であつて、そこにはロシアを通じてのプロレタリアートの戰術輸入の影響が、最も多く作用してゐる。殊にそのなかでも、對外經濟絕交として、最も完全なる形態にまで發達したものは、一九三一―三二年に亘る對日經濟絕交であり、それは最も意識的組織的であつて

それは、次のごとき特色をもつてゐる。

1. 商人側が積極的に行動せること。
2. 婦女子が排日運動に參加せること。
3. 日本製品のみでなく日本產原料品をも排斥せること。
4. 支那人銀行が邦人銀行との取引を斷絶せること。
5. 日支人個人間の往來が斷絶せること。
6. 日本人に對し一切の支那生產品の賣渡を禁止せること。
7. 邦人銀行、船會社、商店の買辨其他雇傭者の退出を強制せること。

かゝる徹底的な排日運動は、日支双方に對して、重大なる影響を與へるのである。

五、支那に於ける排外運動の階級性とその運動形態

支那における排外運動は、その發生期、その社會的階級構成、その動機等によつて、階級を異にしてゐるが、殊にそのヘゲモニーには階級性が明白に表現される。

初期の排外運動においては、國民の全利害が一致してをり、階級性は頗る稀薄なごとく見受けられ、民族性が前面に押し出されてゐるが、それが對外經濟闘爭の形態をとるやうになると、支那における階級構成の變化と相俟つて、そこにブルジョア性が前面に押し出され、ブルジョアジーのヘゲモニーの下に、小ブルジョアジー、農民、手工業者、勞働者等がこれに參加する。かゝる闘爭において、支那の支配階級である軍閥、官僚、地主、商業資本家等は、帝國主義列強と共通の利害を有し、その手先—買辨—としての性質を有するが故に、これに參加することは少く、寧ろこれを壓迫しようとし、また列強からこれを壓迫すべく強要されるのである。

かくして、かゝる對外經濟闘爭は、封建的階級との利害の對立、その壓迫により、闘爭の深化擴大につれて、必然的に對内的に政治闘爭に轉化するが、そのときは支那のブルジョアジーは、地主、商人等との利害關係から、闘爭より脱離し始め、闘爭は弱化される。

排日は何故起るか

かくして、對外經濟鬪爭を政治鬪爭にまで深化擴大し、且××××××を徹底的に遂行し得るものは、支那のプロレタリアート及び農民であるが、彼等のヘゲモニーの下に行はるゝ鬪爭こそ、最も組織的であり、意識的であり、强力であるのである。かの×××××亘る××經濟鬪爭の伸展は、かゝる轉化の萌芽さへ示してゐたのであつた。

その當時、單に經濟絶交のみをブルジョアジーとも遂行してゐても、それは無效である

とするやうになり、四十五萬八千六百五十二枚の民意調査の結果は

質問　回答

××の最良方法　×宣戰　九五・三〇%

當面救國の先決問題　全國的義勇軍の組織　三五・六〇%

國內の和平統一　六四・四〇%

を示してゐる。かくて當時において、略ぼプロレタリアートを代表する輿論には、次のごときものがあつた。

『若しも諸君が眞に支那を愛し、亡國の鬼となるを欲しないならば、諸君は經濟的行動の外に、自らを武裝し、大衆の自發的武裝を援助し、大衆自身の武裝をもつて、××××せざるを得ない。……支那大衆自身武裝して、帝國主義を打倒する外には、各帝國主義國間の被壓迫勞農大衆及び全植民地の被壓迫民族と協同して、帝國主義を打倒し得る手段はない。』(『公道週刊』第二號第九頁)

『政府が××××を願はないのは、事件の擴大　大規模の民衆暴動の發生を恐れてゐるからである。政府が民衆運動を恐れてゐることは、實は××××よりも甚しい。政府ばかりではない。一般に商人の利益を代表してゐる上海の新聞紙も、これと同じだ。それ故に、彼等は鎭靜を主張し、秩序を嚴守して、靜に合理的解決を待つべきことを主張してゐるが、××××を主張する新聞は一つもない。大衆の義憤を顧みずして、××國交を侵犯しないといふのが、彼等の一致の態度である。』(『文藝新聞』一九三一、九、二八)

××××のヘゲモニーを勞農大衆の手に奪取するとともに、これを軍事的政治的行動と結合することの必要が叫ばれ、『××××の××××』として次の六大準備をなした上、バルチザン戰術をもつて、敵軍を攻擊すべきことが主張されてゐた。

1. 武裝及び武裝收藏の秘密場所を準備すること。

2. 里、村、鎭、縣各級に作戰司令を置き、縣と縣との間に聯合機關を設け、民意を代表する軍隊と呼應聯絡すること。
3. 村、鎭、縣の間に敏捷にして秘密なる交通線及び交通信號を設けること。
4. 農民は退却する場合の食糧携帶及び道具の準備をなすべきこと。
5. 勞働者は工場及び市に夫々作戰司令を設けること。
6. 勞働者は都市內一切の交通機關及び生産機關を破壞または携帶する準備をなすべきこと。

かく支那における對外鬪爭は、今や勞農大衆の指導の下に、經濟鬪爭より政治鬪爭、軍事鬪爭に轉化しようとしてをり、かゝる發展はたゞ勞農大衆の指導の下にのみ可能であり ブルジョアジーの指導の下においては、かかる轉化は不可能であり、それには一定の限界が存在してゐるとせられてゐる。

六、支那に於ける對外鬪爭と帝國主義列強の對立

支那においては、歐米帝國主義列強は、強度の經濟的、軍事的、政治的利害關係を有してをり、そのために支那の政治的獨立性は甚しく喪失されてゐる。かくてこそ我々が前に見たごとく、支那は半植民地國家であるのであつて、その特質があらゆる現象に一貫されてゐる。支那に對する一國の進出は、相對的に他の國の退却を意味し、また或る一國の退却は、相對的に他の國の進出を意味し、しかも列強夫々對支進出を希求して已まないのである。

それ故に、或る國—例へば日本—に對して、排外運動乃至對外鬪爭が遂行されることは自己に不利な關係を發生しない限り、他の列強の欣ぶところであり、他の列強は支那の排日運動を好意的に傍觀する。これは消極的な場合であるが、また他の場合においては、他

排日は何故起るか

の列強は、積極的に支那の排日運動を煽動したりまたは援助したりすることがある。

これは、支那における相互の對立から規定されるのであるが、この點を看過してはならない。

數個の列強による、支那の一國に對する對外闘爭援助の場合に、支那において他の列強に操縦されるものは、支那の軍閥、買辦等である。しかしソヴエート・ロシアによるかゝる援助の場合には、その革命的立場から、これと大に趣を異にし、その場合の情勢乃至戰術によつて多少の相異があるとはいへ、支那における革命的團體—例へば共産黨、勞働組合等—を通じて行はれるのである。

他國による、支那の一國に對する對外闘爭の援助は、その國の階級性、その闘爭の性質によつて、その限度が規定される。例へば支那の排日運動が、單に經濟闘爭にとゞまる限り、他の列強はこれを傍觀または援助するが、若しもそれが全面的な反帝國主義闘爭に發展するときは、他の列強は、一列強と共通の立場から、その援助を差控へるし、甚しきは共同戰線の下に、これが壓迫を要求し、または直接に、これを壓迫しはじめる。しかしソ

ヴエート・ロシアの場合には、それが反帝國主義闘爭への轉化の可能性ある限り、それを支持するの性質を有してゐるがためである。

かゝる支那において、帝國主義的對立の存するといふことは、またよく支那の傳統的外交政策であるといはれてゐる。『以レ夷制レ夷』政策に對して、正しい解釋を與へる鍵である支那は半植民地國家として政治的、軍事的に弱い、その上に平和的であり、しかも國家の主權と領土の完整を保持しようとしてゐる。その場合、或る一國が支那に對して積極的に進出し來れば、これと對立關係にある他の國は支那の要求さへあれば欣んで支那を援助するであらう。また、要求されなくても、進んで支那を援助乃至支持して、他の國に對抗するであらう。これが支那において『以夷制夷』政策が行はれる國際的基礎條件である。

かゝる國際的基礎條件—半植民地國家に必然的に隨伴してゐる—は、支那内部にも反映してゐる。すなはち近代支那において頻發してゐるところの内亂、その多くは歐米列強が自己の權益の伸張のために、支那における、その手先勢力を利用し、相互に衝突せしめた

ことによるのである。これは『以ㇾ華制ㇾ華』政策ともいふことができよう。

しかし支那においても、多年の苦い經驗から、革命分子は『以夷制夷』政策の無效果、有害であること、また列強の『以華制華』政策に利用されることの危險であることを、充分に自覺しつゝあり、且つかゝる政策の發生する基礎的國際條件—半植民地國家—から自己を解放しなければならぬと自覺し、そのために鬪爭してゐる。かゝる場合、支那にとつて同盟者が獨りソヴエート・ロシアであるといふことも、彼等の苦い經驗並に科學的理論から理解され、それが斷續的にではあるが、實現されてゐる（一九二五—二七年の支那大革命における暗露政策、最近傳へられるソ支密約）。

ソヴエート・ロシアと支那との提携の場合は、その性質上、資本主義社會主義の對立であり、その前には帝國主義相互の對立は影を潜め、また支那內部においても、革命と反革命との對立となるのではないかと見受けられる。この點も、支那を繞る諸國の對立として、看過することのできない重要なるポイントである。

七、支那に於ける對外鬪爭と學生運動

支那における學生運動は、かの山東還附問題を契機として勃發した、北京大學々生を中心とする所謂五四運動（一九一九年五月四日）を發端として、常に支那の對外鬪爭の先頭乃至中堅をなすやうになつた。この五四運動において、親日派と目されてゐた北京政府の重要人物曹汝霖、陸宗輿、章宗祥三氏の邸宅が襲撃されたが、この運動は實に支那の黎明運動として、劃時代的意義を有するものである。その後プロレタリア前衞黨—共產黨—が支那においても組織され、これが對外鬪爭をはじめ、各種の革命鬪爭を、國民黨とともに指導するようになつたが、前者が最も革命的であり、學生運動も多くこの二者とコースを同じくし、勞農大衆へ働きかけてゐる。

かく學生運動が、社會運動の先頭乃至中堅を成すということは、支那特殊の現象である支那學生は排外的であり、それは排外教育の結果のみではない。

排日は何故起るか

かく學生運動が社會運動の先頭乃至中堅をなすということは、支那が半植民地國家であることによつて規定されてゐる半植民地共通の現象である。

半植民地國家は種々の環境上の理由によつて、學生運動が最も發生し易いのであるが、その理由を簡單に述べて見よう。

(1) 半植民地國家の學生は、そのインテリゲンテイアたることによつて、歐米帝國主義の侵略壓迫を最も痛切に感ずるのである。

(2) 半植民地國家の支配階級は、多くは帝國主義に依存してをり、その手先である。彼等の支配的地位は下層人民の擁護によつて保持されてゐるのではなく、その背後における帝國主義並にそれと共通の利害關係をもつ封建勢力にその基礎ををいてゐる。かゝる關係によつて、半植民地支配階級は對外闘爭に蹶起し得ず、かゝる關係を認識してゐる學生群がその先頭に起ち、被壓迫階級に働きかけつゝ、蹶起するのである。

(3) 半植民地國家の支配階級は帝國主義の手先として、その被支配階級に對しては、常に壓制手段に出てゐるが、その壓制はインテリゲンテイアとしての學生に對して、最も峻

烈である。

かくて、エヂプト、キューバ等の半植民地國家においては、支那におけるがごとく、學生運動が對外闘爭の先頭乃至中堅を成すのである。

今回の、すなはち昨年末よりの第十回抗日運動の先頭に立つたものも、支那の學生運動であり、その火手は先づ日本の北支積極的進出の中心たる北平、天津に上がり、ついで武漢、上海、廣州等學生密集地帶に蔓延しつゝあるのである。昨年十二月十六日の北平學生運動においては、北方支配階級の先頭たる宋哲元等の北支那自治政權樹立反對を旗幟としたのであるが、平津の支配階級はこれに對して彈壓を加へることを忘れなかつた。當時の調査によれば、赤手空拳の男女學生にして、武力彈壓のために、參加者七千七百七十五名のうち、逮捕八名、重傷八十五名、輕傷二百九十七名、行方不明二十五名を出してゐるのである。

(燕京大學學生自治會出版委員會『十二九特刊』第三號)

排日は何故起るか

八、支那に於ける對外闘爭と支那支配階級の態度

支那のごとき、半植民地國家における支配階級は、その資本主義の發達の幼稚なるために、その勢力が微弱であり、しかも帝國主義に對して依存して、漸くその地位を保持してゐる有樣である。それ故に彼等は對外闘爭をなし得ないし、またなしてもその限度は非常に低度である。

かくて、被支配階級を中心とする對外闘爭は、常に支那支配階級の地位を動搖せしめる危險があり、これを壓制しようとしてゐるのである。しかし彼等とても、領土及び主權はこれを侵害されまいとし、かゝる危險のあるときには、彼等も被支配階級と共通の利害の上から、被支配階級の支持を得ようとするし、またその對外闘爭を默認し、敢て彈壓しないのである。

かの北淸事變に先立つて、西太后等の保守派は、拳匪に加擔し、これを庇護し、一八九九年十月二十一日、略ぼ次のごとき宣示を發してゐる……

『……幾萬々の人民あり、各自忠愛の心を振はゞ外人何ぞ恐るゝに足らんや。故に今日亦和を思ふ者あると無し。只だ祖先の住所と墳墓との破壞を豫防するに勉むべきのみ』

この宣示が一たび總理衙門より發せらるゝや、北京朝廷より直接の命令を待たずして、人民にも軍隊にも腕力を使用するの權能を與へたれば、忽ち外異慘虐の時期が開始された一九〇〇年五月十三日には拳匪はコーローの一村落を灰燼に歸し、住民七十名を虐殺した拳匪が押し樹ててゐた旗の上には、『朝廷を防衞し、洋夷を殲滅す』とか『皇命を欽奉し洋夷を殲滅す』とか種々の標語が記されてゐた。外交團がこれが取締を要求しても、曖昧に腕押しで少しも效果はない。これを評してデジャルダン氏は、『支那人の口實とする所は、何時も政府は被治者に對し、被治者が厭忌する條件中の某々條欵を實行する能はずといふに在り。是れ實に彼等の常套なり』といつてゐる。

（註一）デジャルダン稿、邦譯『國際支那』第四一―二頁

排日は何故起るか

（註二）同上書第四一頁

（註三）同上書第五〇頁

かゝる常套手段は、一九〇〇年においてのみ見るのではない。一九三五年の末に平津學生運動が、廣州にまで擴大したときに、學生運動取締に關する河相總領事の警告に對し、廣東廣西兩政府は、『學生運動は國民のやむに止まれぬ愛國運動の一發露であり、日本が北支工作を斷念せぬ以上、政府當局としては學生愛國運動を取締ることは出來ぬ』と答へてゐる。このことは、北淸事變前における西太后等の對外鬪爭に對する態度と軌を一にするものである。

（32）

しかし、支那の支配階級も、支那の對外鬪爭は反封建鬪爭に轉化するし、かくて自己の地位が危殆に瀕すると、これを惜しげもなく彈壓することは、前述したごとくであるが、今次の學生運動についても、廣東廣西兩政府は『學生運動にして支那の秩序（彼等の地位—筆者）を紊るにおいては、日本の要求なくとも、支那自身これを取締る』と告白してゐる。

（註一）一九三五年一二一九日『大阪毎日新聞』

（註二）同上

九、第十回抗日運動と、人民戰線との關聯並にその特色

今回の第十回抗日運動が、我が北支積極的進出によつて、平津學生運動を發端として擴大したものであることは、すでに前に述べたごとくであるが、今稍々詳しくこれを檢討しよう。

平津に勃發した學生運動は、武漢、上海、廣東等に蔓延したが、彼等は請願運動、デモンストレーションに滿足し、政府當局に期待することはできなかつた。彼等は、被壓迫階級に働きかけ、それを組織し、それをともに反帝國主義、反封建主義鬪爭を遂行すべく、彼等の運動は民衆の間に喰ひ入るようになつた。

排日は何故起るか

（33）

彼等は自己の運動を批判して、次のように述べてゐる。

『吾々は、たゞ吾々自身と廣大なる被壓迫大衆と、自動的に密接に結合し、共同に組織し、吾々自身の力によつて、帝國主義とその走狗と死活の鬪爭を決行せんと希望する。』

（『十二九特刊』第二號第二頁）

『今回の運動の焦點は、一切の被壓迫階級を聯合し、大衆の力を充實し、一つの異常に堅固な團結組織を形成することである。』（同上第一號第二頁）

かくて、一時的な、『南下擴大宣傳團』は、軍隊警官の壓迫の下に解散されたが、それは永久的な『民族解放先鋒隊』として再組織され、北平において今や約千名の會員、天津三、四百名、山東、上海、保定、フランスにまで、中外にその組織を擴大し、常に自らを訓練するとともに、農民、勞働者、軍隊に對して、宣傳と組織工作を進めてゐる。

この組織は合法的であるが、その活動は活潑にして、各地の抗日救國會や共產黨と連絡して、その工作を擴大しつゝあるごとくに見受けられる。この一つの潮流の外に、他の一つの潮流が存在してゐる。それは一九三五年八月コミンテルン第七回大會における人民戰

線結成の決議にして、これが支那においては、その半植民地性と日支關係との關聯上、抗日共同戰線の結成として採用された。新聞紙の傳へるところによれば、かくて中國共產黨は『勞農ソヴエート政府』をすでに『人民ソヴエート政府』と改稱し、また南京政權に對してすら『國防政府』樹立のための提携を提議してゐる。

右の戰略實施のために、中國共產軍は、『對內的には、黨及び軍の仇敵たる蔣介石を含む各地軍閥、ブルジョアジーといへども、抗日運動に參加せばこれを抱擁し、對外的には從來の帝國主義一般に對する排擊をやめ、かへつて歐米帝國主義とは、百方提携して、日本帝國主義にのみ鋒先を向ける』

と宣言し、中國共產黨はまた『全支抗日戰線組織に關する檄文』を發して、これに次のごとく述べてゐる。

『……支那國民の國家的存在は、絕大なる脅威の下にをかれてゐる。この危急存亡の秋にあたり、支那ソヴエート政府及び共產黨は、全國民に對し、萬民は諸黨派間における

排日は何故起るか

政見利害の相違に拘らず、諸階級間における意見利害の相異に拘らず、又過去現在を通じ諸軍隊における敵對行動に拘らず、日本の侵略に當面し、一人のごとく團結し、内戰に拘らず、外敵に對し共同鬪爭せよ！」との我が國民的スローガンに目醒め、先づ國内武裝鬪爭、殊に蔣介石が自國民に對して行ひつゝある戰爭をやめ、抗日救國に國民勢力の全部を集中しなければならない。而して若し國民黨軍隊にしてソヴエート區攻擊を停止して抗日鬪爭を行はんか、共產軍は共產軍蔣介石軍間における多年の軍事行動及び支那國内建設に關する彼我見解の相異に拘らず、卽時に蔣軍に對する軍事行動を停止するのみならず、共同救國武裝鬪爭のために、進んでこれに手を差し延べるであらう。』

といひ、更に

『支那ソヴエート政府及び滿洲反日地方政權とともに、國民防衛全支共同政府を組織するため、支那共產軍及び滿洲反日パルチザン部隊とともに、全支共同抗日軍を組織するための鬪爭に蹶起せよ！』

と指令してゐる。

かゝる抗日共同戰線結成運動は、前の學生運動とも一脈相通ずるものがあるが、その他國内各方面の勢力に、今や重大なる作用を及ぼしてゐる。かゝる運動の溫床の上に吹き出たものが、上海における中山、萱生事件をはじめ、成都、北海、漢口、上海等に相續いで頻發してゐる不祥なる邦人に對するテロリズムであるのである。

かくて、今回の抗日運動を見るに、次のごとき特色がある。

1. 我が北支積極的進出それに伴ふ支那の國家的存在の絶大の脅威を防衛するといふ重大意義をもつてゐること。
2. 人民戰線の基礎の上に、各方面の共同武裝鬪爭が結成されつゝあること。
3. 鬪爭目標が日本にのみ集中され、他國に對しては共同さへも示唆されてゐること。
4. 從來のごとき、日貨排斥その他の經濟絶交による經濟鬪爭を飛躍して、たゞちに政治鬪爭となり、しかも武裝鬪爭の形態をとつてゐること。
5. 政治鬪爭が、國内の反封建鬪爭に轉化する間隙を存してゐないこと。

かくして今や日支關係は正に全面的に正面衝突の危機に臨んでゐる。それ故に今回の

排日は何故起るか

不祥事件を契機として、日支國交を全面的に調整しようと希望しても、その希望は實現性に乏しいといはねばならない。

日支國交の全面的衝突が、事件のみの一括的解決が、今かゝる岐路に立つてゐる。我が朝野は、大陸政策に對して、今重大時期に際會してゐる。深く世界狀勢、日支狀勢を洞察して、この難局に善處してゆかねばならない。

たゞ當面の問題として、在支邦人の生命財産の安全保障のみは、條約上の義務として、支那に對して、公平に且つ斷乎として要求して憚らないと思ふ。その他の問題は、多大なる變革、大なる犧牲なくしては、これを解決することは、實に不可能であるのではあるまいか。

この日支關係の危急の秋にあたり、吾々は支那に對する輕卒且侮蔑的な行動言論を愼み、隣邦の猜疑を買ふことなきに努むるとともに、愼重に且つ眞摯に、支那問題を認識して、その上に善處するところがなければなるまい。

若し夫れ吾々には何等の利害をも齎らさざるの直線的行動に出でんか、不測の困難に投

すべく、現下の問題を解決する希望は、なほ他の方法にあり、斷乎として正當公平なる要求と處置をなすべきと同時に、愼重事にあたるべきであらう。

風雲急なる日支關係は、現下において、全國民の注目の焦點であらねばならぬ。（完）

編輯後記

◇成都、北海事件を端緒として日支間の空氣は愈々深刻化を見せて來た。出先軍部は、川越大使に外交々渉を打切れと進言した。兩者對峙の劍惡化を見る。

◇然し、日支衝突の報は、日本人にも支那人にも餘り珍らしい事ではない。それだけ又、日支兩國間にとつて不幸な事である。一體斯る日支間の對立は何處から釀される か。支那の排日は一體何故起きるか。目下これがバンフレット・ヂャーナリズムに依つて究明されなければならぬ問題である。そして、それが何處迄發展するか?

◇本書は其の意味で支那にある事二十年、支那事情に明るく、其の道の專門家たる田中忠夫氏に渡支早急なるにも拘らず特に依頼して書かれたものである。荒尾久は氏のペンネームである。

◇本書房のバンフレット出版は、他社とは自から異つた編輯角度を持つてゐる。堅い時局問題を取り上げても、其處には柔か味と、親み易いものを見出すつもりである。從つて、本書房發行のものを順次取り揃へられるならば何れも據點を突いた、文化綜合バンフレットたる事を見出されると思ふ。

排日は何故起るか

定價十錢(送料二錢)

昭和十一年九月二十八日印刷
昭和十一年十月 二 日發行

(不許複製轉載)

著者 荒尾久

發行兼印刷人 伊藤稔 東京市芝區田村町三十番地

印刷所 文光社印刷所 東京市神田區旭町十二番地

發行所 第百書房
東京市芝區田村町三十番地
振替 東京 九〇七七番

營業所 東京市芝區田村町壹番地

東京鐵道局公認 鐵道保養會(鐵道各驛ホームスタンド一手販賣)
鐵道弘濟會・鐵道授産會

大取次
森田書房・富田報英堂
東京堂・大東館
新正堂(京阪神一手扱)
川瀨書店(名古屋)

国立国会図書館

第百書房刊行書目錄

（定價各十錢 送料二錢）

辰野九紫著	萬引一代女	
濱本浩著	戀の決死隊	
中村正常著	歲末遣繰譚	
東京每夕新聞編輯局編	女の日記	
森蠡昶著	私の事業哲學	
相佳福郎著	德田榮子の手記	
東京每夕新聞編輯局編	惚れられた話	
安藤成著	セレベス島女風景	
東條貫太郎著	スパイ禍の日本	
坂川辰馬編	二・二六事件斷罪記錄	
乾信一郎著	二・二六事件の惑星北一輝と西田稅	
大平進一著	戰爭はいつか	
宇佐美謙著	東京オリムピック大會を目指す金儲け	
青山謙介著	文部大臣平生釟三郎とはどんな男か	
靜木恒夫著	小林一三と大谷竹次郎	
荒尾久著	排日は何故起るか	

▼御注文は すべて前金にて本社直接に願ひます。代金は振替貯金又は二錢郵便切手にて定價に送料を添へて御申込下さい。

演劇王國の傳統ある牙城を死守せんとする

松竹の大谷竹次郎

鬼才と度胸とを持つて松竹の心臟を寒からしめつゝある

東寶の小林一三

近頃これ位面白く手に汗を握らせるやうなスリルは他にない東洋一を誇る日本劇場の獨占、帝都の中央丸ノ内街への勇敢にして華々しき進出！と思つた瞬間に、帝國劇場の見事な收奪！松竹の牙城は刻々に決潰されて行く。深夜ひそかに數寄屋橋の袂に一人たゝずんで丸ノ内興行街のネオンをヂツト見つめてゐる無帽の老紳士それは東寶の攻撃戰をスパイする大谷竹次郎の深刻な姿であつた。それ程東寶と松竹の對立は深刻極まるものがある！

本書は此の兩者の攻防陣をエグリ出した百パーセントのスリル！ 目下「小林一三と大谷竹次郎」と題して發賣、物凄い賣行を見せてゐる。卽刻求められよ

（價十錢・送料二錢）

東京市芝區田村町三〇番地 振替東京九〇七七番 第百書房

第百書房・近刊豫告

十月五日一齊發賣

久原房之助と石原廣一郎

四六版・四十八頁
定價金十錢（送料二錢）

政界の惑星・久原房之助！　財界に新らしい巨歩を踏み出して其の惑星　存在が云爲せられるに至つた南洋航路の開拓者石原廣一郎！　彼等は一體どんな人物か

本書は此等二人の怪物を拉し來つて、彼等の人物論と彼等の動靜とを書き上げた興味津々たる讀物として、出版前既に各方面から熱狂的期待のがけられてゐるパンフレツトである。

（全國各驛賣店、ホームスタンドにて發賣、品切れの節は直接本書房へ申込め）

女の日記（他四篇）

◇四六版二百頁・並製　◇定價金三十錢（送料六錢）

內容

辰野九紫　萬引一代女
濱本　浩　戀の決死隊
中村正常　歳未遣繰譚

東京每夕新聞編輯局　女の日記
中村正常　適齡ガール三人組
大河內武二郎　德田榮子の手記

本書は、既刊五種の合本である。二百頁で僅か三十錢。どれを讀んでも面白く、著者は何れも一流有名の文筆家揃ひ。かつて物凄い好評を博した實話讀物ばかりを集めたもの。二百頁の內容だと、普通の出版物で一圓以上の定價、それが三分の一の廉價で讀める。

全國各書店にあり。品切れの節は本社へ直接申込まれよ。

東京市[illegible]區[illegible]町三〇
振替東京[illegible]〇七七番

第百書房

好評！最新刊目下發賣中!!

東條貫太郎著　スパイ禍の日本　新刊・忽ち十版　價十錢・送料二錢

坂川辰馬編　二・二六事件斷罪記錄　新刊・忽ち一五版　價十錢・送料二錢

乾信一郎著　二・二六事件の惑星　北一輝と西田稅　新刊・忽ち二〇版　價十錢・送料二錢

大平進一著　戰爭はいつか　最新刊・忽ち三版　價十錢・送料二錢

宇佐美謙著　東京オリムピック　大會を目指す金儲け　最新刊・忽ち六版　價十錢・送料二錢

青山謙介著　文部大臣　平生釟三郎とはどんな男か　最新刊　價十錢・送料二錢

東京市芝區田村町三〇　振替東京九〇七七番　第百書房

森田醫學博士推奬

強腦強精　滋養強壯

オオコンリオン

何が彼氏をさうさせたか？　强精！　健康！

オオコンリオンは强力ホルモンと强力ヴイタミンADとの綜合による最新の製品にして、殊にヴイタミンの含有量は最上位である。實に本劑一粒は、驚く勿れ、鷄卵十五個、牛乳三升、普通鱈肝油三十瓦のVA含有量に匹敵する偉力を持つてゐる。しかも本劑は日本の土壤と常食物との缺陷を研究して作られた理想的營養劑として、各方面から『なる程これだ！　心から求めてゐた藥はこれだ！』と喜ばれて眞實に効目が實證されました。左の症狀のある方は勇敢に試用あれ、必ず其効目が判ります。

機能衰退。早老。中老。初老現象。動脈硬化。血壓亢進。視力衰退。虛弱體質。神經衰弱。頭痛症。ヒステリー症。肺結核。肋膜炎。肺尖カタル。慢性氣管支炎。病後の衰弱。貧血症。陰萎。不感症。性慾減退。身體がダルイ。何となく弱い人にはメキ〳〵効目が分る。

◇定價　壹圓五十錢（四五粒入）三圓（百粒入）八圓五十錢（三百粒入）十三圓（五百粒入）

發賣元　東京市芝區田村町四の十八　振替東京五九七四八番　今日の問題社

◇御申込は前金。振替又は爲替にて本社直接に願ひます。送料不要。試藥文献二錢切手三枚お送りの方に無代進呈します。

ゼツト萬年筆

★萬年筆の大革命！　これを使つたら、從來の萬年筆はとても使ふ氣になれぬ！　安くてスラ〳〵書けて、モダン！　斷然理想的！

ゼツト萬年筆の特長

◇從來の萬年筆とシヤープペンシルの缺點を悉く補正したもの　◇型は文字通り流線型で、ペン先は細い管狀になつてゐるので、書き易く、近代的感觸にピツタリと來る　◇書く時にインキを調節するため一々振る等の面倒がなく、何時でもすぐ取出してスラ〳〵書ける　◇インキが洩れたり、出澁つたりしない。いくら振つてもインクが飛んだり、書いてゐるうちにポタポタ落ちることは絶對にない　◇ペンは正十四金、イリヂユームは北海道產の最硬質、軸の材料は優良品を使用して、耐久力はこれ以上のものなし。

◇目下、日本國中大評判、外國からも大歡迎の注文！「これは素晴しい」「とても從來の萬年筆など使へない」と斯界に旋風を捲き起した最新發明のゼツト萬年筆！　今すぐ試用して見て下さい。

定價　二圓。二圓五十錢。三圓　三圓五十錢。四圓。

◇尙優美な事務用萬年筆二圓均一並にスタンド八十錢、一圓、一圓三拾錢もあります。

販賣希望者並に特約店募集　發賣所　東京市芝區田村町四の十八　振替東京五九七四八番　今日の問題社

HM
SP 15037
#797

354.772
316.2208